

個人文庫展
— 西欧学術の追求 —
拾遺二題

その1 この展示会（昭和57年度開催）の出陳本の中に、森立之撰・服部雪斎画『華鳥譜』（手稿本）がある（同展示会目録162番参照）。同書は内閣文庫にも自筆本として架蔵されている。頃日、元当館司書監鈴木重三氏について同文庫本との対校に赴いた。確かに自筆本にふさわしい品性があり、当館本と同様森立之の序文があり、その筆跡は酷似するが、若干構図に異同がみられた。

この対校の折に、同文庫本の第1丁袋部分に、偶然に「華鳥譜目次」「華鳥譜初稿絵日目次」と栗本丹洲著『魚譜』の絵日目次の手控え記録を見出したのであった。まさに百聞は一見に如かずの感じてあった。

この「華鳥譜初稿絵日目次」は、実際に画いた日付と鳥名を、年次を追って克明に記録したもので、それによると安政6年（1859）9月28日から書き始めて、翌7年（1860）8月5日に終了し、全部でおよそ67品を描き、紙数69葉を用いたと書いてある。同書の立之の序文では夥しい羽族の中から61品を摘録したとしている。同序文は万延2年（1861）正月に書かれている。

この時間的経過をみると、上記の記録は、雪斎が描き始めてから立之の序文が書かれて『華鳥譜』が成立するまでの経過をまさに明証する貴重な記録といえることができる。

片片たる記録といえどもあだ疎かには

できない一つの例である。

その2 一口に「自筆本」とか「自筆稿本」とかいうのはたやすいことだが、目録上にそれを書き切ることは甚だ難しい。かなりの眼識と傍証資料を駆使した上での決断が必要である。

当館所蔵渡辺崋山旧蔵書中の一つに、小関三英訳『新撰地誌』（同目録2番参照）がある。すでにご覧になった方にはご承知のように、該書のいたるところ胡粉で塗抹して改稿しており、一見稚拙な筆跡ながら単なる写しではない特徴などを見抜く程の眼識のある人なら、容易に自筆稿本と断ずるに違いない。しかし一応理屈でわかっていながら断定するに一抹の不安がある。

そこで傍証に当館所蔵の三英尺牘と対照してみた。ところがその尺牘は差出人も宛名も書いてない代物だ。三英自筆本はいずこにと探してみると、鶴岡市郷土資料館に三英自筆書簡を、また天理図書館には三英自筆とされる『鑄人書』^{ちゆうじんしよ}を架蔵していることを知った。

そこで先ず天理図書館にコピーを依頼したところ3ヶ月程かかるという。すぐ山形県教育庁の三春伊佐夫氏を通じ鶴岡市郷土資料館の堀司郎氏にご無理を願ってコピーを贈っていただき早速照合してみると、『新撰地誌』の三英の署名と同書簡の署名とが誰れの目にも同筆と判断され、その他本文の筆跡も同筆に誤りないと断ぜられた。

かくて崋山旧蔵書『新撰地誌』を小関三英の自筆訳稿本と記述したのであった。

時間に制約される展示会目録の記述には予想以上の神経を使うものである。

（貴重書室・五十嵐金三郎）